

## 平成28・29年度の登山専門部長及び役員への質問

平成29年9月10日

登山専門部及び役員の皆様に質問させていただきます。第一次報告書で指摘された内容については既に要望を出し今回説明いただいておりますので、それ以外のことで質問をさせていただきます。

私たちは、この雪崩事故がどうして起こってしまったのか、何が足りなかったのか、どうすれば回避することができたのかという根本的な疑問に対する回答を求め続けています。

検証委員会第一次報告書、国立防災科学技術研究所の現地説明会、生徒たちの証言などを基に、私たち自身が検討を重ね、いくつかの「確かなこと」にたどりつきました。そのことを基にして質問をさせていただきます。

登山専門部は平成28年度の役員の方にお伺いする質問が多くなると思いますが、誠実なご回答をお願いします。

### 《私たちにとって確かなこと》

- 1 本件の講習会は、積雪期登山の正しいあり方と安全登山の知識・技術を習得し、登山事故防止を目的にしている。登山の事故防止を学ぶ講習会で、絶対に起こしてはならないのが死亡事故だ。しかし、訓練の場で雪崩事故に遭遇し、8名の尊い命が奪われた。この死亡事故の事実を、講習会を主管した登山専門部は、真摯に、重く受け止めなければならない。そうしなければ8名は救われない。
- 2 雪崩に遭遇するかどうかは、人間がそこにいたかどうかだ。雪崩の発生原因の問題ではない。雪崩回避は、そこに入るかどうかの人間側の判断の問題だ。  
1班から4班までが雪崩に遭遇した。回避ができなかった。1班は8名が存在と未来を一瞬にして奪われる、想像を絶する痛ましい結果になった。  
当日あの現場に行くことを決めたのは指導者の判断だ。生徒ではない。雪崩回避ができなかったのは、指導した登山専門部役員と各班講師の状況理解と判断が間違っていたからだ。
- 3 危険を知らせる情報はたくさん出ていた。気象予報も、その日の気候も、地形的条件も、積雪量も、雪の状態も、視界も、これらの全てが、雪崩の危険を知らせる情報を指導者に送っていたが、正しく受け止めることができなかった。その結果雪崩を回避する機会を逃し、雪崩に巻き込まれてしまった。
- 4 様々な雪崩情報に接しても、正しく危険性を受け止められなかったのは、感性が鈍くなっていたからだ。感じ取れなかったから、安全だと盲信し、雪崩事故の現場に入っていった。  
茶臼岳登山を中止したことで危険を回避できたと思い、基本的な安全確認や情報収集をしなかった。各班講師は、情報から雪崩の危険性を感じ取ることができなかった。感じ取れないから、漫然と安全だと信じ込み、雪崩の現場にキックステップで登ってしまった。

5 大雪注意報、雪崩注意報が発令されている中、ラッセル訓練を実施した指導者の判断は間違いだった。

あの日、平地でも寒く雪が降っていた。大雪や雪崩注意報が出ている中で、冬山装備も十分でない状態で、なぜ、普段使ったこともない危険ルートに登り、結果的には登山と同じような訓練を行ったのか。なぜ「止める」という考えが起こらなかったのか。万が一のことをどうして考えられなかったのかなど、指導者の認識と判断の甘さに強い憤りを感じる。

6 訓練時、各班講師は本部との連絡や講師間の連絡をしていない。相互チェックや助け合う関係がなかった。このことが危機判断を遅らせ、被害を大きくした。

7 ラッセル訓練に計画を変更し、雪崩の危険のある斜面に入ることを決めた指導者たちには日々の生活がある。指導者の言を信じた生徒の多くは若い命を散らした。何てことだ。どうしてこんなことになったのだ。

遺族は突然悲しみの底に落とされた。悲しみの底はかすかな明かりさえ届かない、出口のない谷底だ。当たり前前の日常を取り戻したくて、どこに向かっていけばまた息子に会えるか、暗い底でいつまでも考え続け、迷い続け、泣き続けている。

## 《平成28・29年度登山専門部長及び役員への質問》

1 雪崩事故について、現時点での登山専門部の見解をお聞きします。

- (1) 雪崩事故はどのように起きてしまったのか。
- (2) 何が足りなかったのか。
- (3) どうすれば回避できたのか。

2 登山専門部の姿勢について、お聞きします。

(1) 遺族、被害者への謝罪と説明について、どのように考え、どのように取り組んできたのか。

登山専門部は、自らが主管する春山安全登山講習会の訓練の場で雪崩事故に遭遇し、8名の尊い命が奪われた事実を、真摯にそして重く受け止めなければならない。

登山専門部は、この講習会の現場責任者である。計画から、事前調査、講師選定、具体的活動の設定、現場の指揮命令、安全確保、生徒の教育的配慮など、現場の全てを担う立場である現場責任者として、遺族等への弔問と謝罪と説明に常に心がけなければならない。

5月28日登山専門部執行部は初めて説明会を開催したが、自らの意思で開いたものではなく、遺族の強い要請にこたえて開催したと認識している。

これからも、平成28年度の登山専門部執行部は、遺族の納得がいくまで説明会を行う責任があると考えている。

(2) 遺族の話を聞くことをこれからも続けていかなければならないと思うが、どう考えているか。

私たち遺族等は、高体連や登山専門部に、遺族に寄り添う姿勢を求めてきた。遺族や被害者がどれだけ苦しんでいるのか、何を望んでいるのか、そのことを聞かなければ、再発防止はできないと思う。

前会長は、弔問の時、8名の死は絶対に無駄にしないと約束をしていた。しかし、私たちが要望を出さなければ、高体連も登山専門部も遺族等に自ら説明しようとはしない。遺族等の話を聞こうという気持ちもない。遺族の悲しみや苦しみを置き去りにした再発防止対策は、8名の命を無駄にしないという約束とは違うと思う。

8名の命がどれほど大切なものであり、それを失った悲しみと苦しみがどれほどであるのか、遺族の話を聞くことをこれからも続けていかなければならないと考える。

8名の命を無駄にしないというのは、そういうことであると思う。

3 開催通知にかかわることについて、お聞きします。

(1) 本件講習会では、高体連会長と登山専門部長の連名であるが、ずっとその形で行われてきたのか。登山専門部が主管する他の事業においても同じであるか。

(2) 開催通知は高体連会長まで回議したのか。しなかったとするとそれはなぜか。

開催通知は、主催者の高体連会長まで回議したのか。また、各学校が部活動の一環として参加するならば、県教委や県立高等学校長会や参加する私立高等学校の合議が必要であると

考えるが、こうした関係機関への合議はしたのか。しなかったとすればそれはなぜか。

(3) 本事業の開催について、県教委とはどのようなつながりをもってきたのか。

部活動の延長にこの講習会があるならば、県教委とのかかわりは不可欠であり、一般的には、県教委の後援や共催が考えられるが、本件講習会ではそうした形にはなっていない。高体連の単独の取組のように見える。

(4) 春山装備しかもっていない生徒たちを冬山と同じような雪山につれていったことになる。これは正しい判断であったのか。

開催通知では、装備として春山登山の装備となっている。しかし、実際は大雪注意報が出ていて、30cmを超える新雪をラッセル訓練で上がっていく活動を行っている。生徒たちの証言によると、第1班は樹林帯を抜けたところで休憩をしたが、寒いので風を防げる天狗の鼻まで行きたいと前に進むことを講師に訴えたと聞いている。

(5) 生徒と顧問を同時に受講者として募集する形をなぜ行っているのか。いつごろからそのようなやり方で行っているのか。

開催通知では、本件講習会に生徒と経験の少ない顧問を募集している。生徒と顧問を同時に募集することには無理がある。生徒は3日間全て受講者であるが、顧問の場合、どこまでが受講者であり、どこからが引率の役割なのか区別ができない。ラッセル訓練では生徒と一緒に行動しているが、引率者でもあり受講者の立場でもあるということなのか。余りにもご都合主義的な使い方だ。

4 実施要項にかかわることについて、お聞きします。

(1) 登山専門部は講習会の実施要項を作成していたか。作成していないとするとそれはなぜか。

実施要項の作成は、複数の学校が集まって運営される講習会では、指導者の意識や行動の統一、活動時間や活動場所の共有など、欠くことができないものである。実施要項が作成されていないとすると、非常にあいまいな役割意識の中で指導者は動いていたのではないか。

(2) 実施要項は誰が作成したのか。作成していなとすると本来は誰が作成しなければならなかったのか。

(3) 実施要項の起案は、どこまで回議をしたか。

委員長決裁か、部長か、会長か。作成していない場合、どこまで決裁をするのが良いのか。

(4) 気象情報の収集は、誰がそれを行っていたのか。その情報はどのように指導者、生徒に伝えられたのか。

5 運営のかかわることについて、お聞きします。

(1) 生徒の中には、装備不十分でラッセル訓練に参加しなかった生徒もいた。ラッセル訓練の場合、どのような装備が必要なのか。

ビーコンは高価であることや本格的な冬山登山でない講習会なので高校生に持たせないと聞いている。ゾンデ棒も雪崩を想定していないため持たせなかったと聞いている。

本件講習会が積雪期の安全登山を目標としていることと、雪山ではどこでも雪崩の起きる可能性があり、雪崩危険場所に入ることは大いにあり得ることであることを考えると、ビーコン、ゾンデ棒、スコップは持たせることは必要であると考えます。

値段の問題ではない、また高校生の講習会だからという問題でもない。雪山に登るのであれば、雪崩事故の可能性を考え、持たせなくてはならない。高校生が持って学ぶことが安全登山の学習であり、将来の雪山登山に役立つはずである。

安全対策の上でも、安全登山の講習の上でも、生徒や保護者の心の準備の上でも、積極的に持たせるべきである。こうした考えを持たない登山専門部執行部の雪山対策は、根本から考え直すべきである。

- (2) 登山専門部では当日の班別名簿は準備されていたのか。作成されていないとすると、どのような理由からか。

自分の班以外の生徒名などの情報を指導者が共有するためにも、班別名簿は必要である。

- (3) 本部として、生徒の連絡先を把握しておく必要があると思うが、連絡先一覧のようなものを執行部は用意してあったのか。用意されていないとすると、それはなぜか。

- (4) ラッセル訓練への変更は、当日の朝、安易に決定する事柄でない。ラッセル訓練を行う判断は、今まで足を踏み入れたことのない樹林帯で計画にない新ルートを使うことを意味している。あの気象条件や地形的条件の中で雪崩の危険性がある場所に入ることの判断である。明らかな状況判断ミスである。3名の判断というよりも、そうした判断をする体質が登山専門部にあるのではないかと思うが、どう考えるか。

生徒達を連れて登山をする場合、予定のルートについては事前調査を行い、それ以外のルートは、緊急性があるときを除き、基本的に使わないと聞いている。本件講習会は、結果的に見れば、登山を中止し予定のルートは使わなかった。代わりにラッセル訓練で事前調査もしていない、これまでもほとんど使った経験のない新ルートを、キックステップで登っていくことになった。この予定にないルートを使う判断をしたことが、雪崩危険地域に入っていくことになった。新ルートを使うことの危機意識がないことが大きな誤りだ。しかし、指導者たちは自分たちの認識と判断に瑕疵があったとは思っていないような発言や反応である。

特に、雪崩当日にかかわっていない役員は、登山専門部の判断に過失があったという意識が少ないように見える。もし自分が3名の立場にいたら、ラッセル訓練への計画変更をしなかったらどうか、あるいはそうした提案があっても、明確に反対の立場で意見できたらどうか、尋ねてみたい。

- (5) 本部はどのような役割をすところか。本部の役割をはたしていたか。

私たち遺族としては、本部は、全体の把握、調整、支援、連絡などを行うと考えている。本件講習会でも指導者への情報提供や働きかけが重要である。

(6) 本部はどこに設置するのが、適切か。

本部の設置場所は、もっと生徒の活動が見渡せるところで、最も危険が予想される場所付近に設置するのがよいと考える。船長が船の進むべき航路を見渡せて、常に危機回避を指揮できるところにいるように、本部はそうした場所に置くべきである。

本件講習会の本部の設置は、生徒の危機をすぐ感じられないという点で致命的な間違いをしていると考えている。

(7) 教員仲間同士による講習会の運営が、手続きの省略や慣れによる確認や丁寧な説明を必要としない仕組みを作り、危機管理や安全対策の欠落を招いたのではないかと思うが、どう考えるか。

本件講習会は、各学校の山岳部顧問が必要に応じ、臨時的に集められた組織体が運営している。共通の目的を持った教員仲間であることが、強味にも弱点にもなっている。高校生を常に指導している教員同士であるため、指導内容や指導法については細かな打ち合わせをしなくても、各顧問に任せておけば大丈夫という意識や感覚が知らぬ間に醸成されている。そうした感覚は、学校の各教科担当教諭や部活顧問に一任する形と同じである。分任方式である。学校がそうした分任方式で成り立つのは、細部まで計画されたものがあるからである。目標や指導内容、指導時間などの共有化ができているからである。

本件講習会の執行部には、教員以外の外部指導者が含まれていないため、丁寧な説明を必要としない。すでに分かっていること、知っていることは確認作業をしなくても各顧問が自主的な判断で、活動が成り立っていく。分任しておけばやってくれる。

この傾向が長く続くと、大事なことも省略あるいは簡略化されていくことになる。同じ立場で仕事をしている仲間なので、分かっていることを前提としている。こうしたことにより、生徒に接する指導者の認識と判断に多くを任せる形で運営されていく。下にやらせる運営とあってよいだろう。日常的な場面では機能していくが、危機的、緊急的な場面では本部が役割を果たせず、危機対応ができない安易で杜撰な運営が日常化する。

仲間同士の慣れによる危機管理の欠如を改善するのは、抜本的な改革が必要だ。危機意識の向上、危機対応、危機管理について、あらゆる場面を想定して対応できる資質と能力と意識がもてるように自らの努力と厳しい外部からの指導助言が必要だ。

6 指導者にかかわることについて、お聞きします。

(1) 講習会第3日目の最も難しい判断と行動を行う日に、引率教員の人数が最も少なくなるという状況を、登山専門部執行部は事前に承知していたと思うが、安全対策、危機管理の上で、問題である。どのように考えていたのか。

3日間の引率教員の人数は、第1日目16名、第2日目17名、第3日目11名である。なぜ第3日目がいちばん少ないのか。茶臼岳登山を行う日である。危険性が最も高い日に人数が一番少なくなってしまう。講師の数を見ても、第2日目が2名ずつ配置されているが、第3日目は1班から5班まで講師は1名である。引率者がつかない班もある。

(2) 活動中における本部と講師の定期的な連絡がどの程度行われたか。また、各班講師同士の相互の連絡がどの程度行われたか。

班別活動のときに、互いに連絡し合い、助け合う関係がなかったことが、下山のタイミング

を遅らせたのではないかと考えている。本部と各班講師との連絡、各講師同士の連絡が行われていれば、雪崩回避や救助で違った結果になっていたのではないかとと思われる。

7 講師たちの雪崩発生に対する認識について、お聞きします。

(1) 第1次報告書の後の聞き取り調査で、「滑落だけは心配した。雪崩ということをお心配した人は一人もいない。」と、検証委員会委員長は説明した。これは、講師全員が聞き取り調査において、茶臼岳の雪山登山やラッセル訓練で滑落は心配したが、雪崩は心配しなかったということだ。信じられない回答だ。こうした講師たち認識について、登山専門部はどのように考えるか。

以下は、雪崩をお心配しなかったということに矛盾する講師たちのこれまでの発言である。

- ・5/28の登山専門部の説明会の質問で、27日までの気温の変化と積雪により、雪崩を引き起こす可能性が増すことについては、一部の認識の違いはあるが、講師たちは知っていたと答えている。
- ・大雪注意報や雪崩注意報がでていたことをほとんどの講師は知っていた。
- ・現場が雪崩の条件がそろっていると認識していた講師は少なかったが、雪崩が起きやすい条件については、多くの講師が認識していた。
- ・当日の朝、積雪のため今日はテント待機であると思っていた講師がいる。
- ・ラッセル訓練に変更になったとき、樹林帯の中ならば安全だと考えていた講師がいる。これは、滑落の心配ではなく、雪崩の危険性がないということだと考えられる。
- ・講師打ち合わせのときに、「雪が多いから十分に気をつけよう。あまり上には行き過ぎないようにしよう。」との発言があったと聞いている。雪崩発生の危険を予想した発言である。

(2) これまでの発言から見ても、登山を指導する立場の講師たちが、全く雪崩発生を考えなかったということは考えられない。雪崩は起きるかもしれないという心配よりも、これまでも起きなかったのだから、大丈夫だろうという認識で判断したのではなかったのか。この点を再度調査してほしい。

8 登山専門部長の責務について、お聞きします。

本件講習会の実施において、登山専門部長は、どのような役割と責務を持つのか。

教員には代理保護監督者としての監督義務がある。本件講習会においては積雪期の登山を研修内容としているので、雪崩事故を想定して事前調査、ラッセル訓練変更における危険性の事前説明、活動時における安全注意などの義務を負うと考える。一方、主催者の高体連と主管の長である登山専門部長は、全体管理者としての注意義務が課せられていると考えられる。

9 春山安全登山講習会について、お聞きします。

(1) 春山安全登山講習会は、栃木県内の高校生にとって本当に必要な講習会であるか、検討すべきだと思うが、どう考えているか。

検討すべき理由は以下である。

- 長い歴史をもつ安全登山講習会であるが、絶対に起こしてはならない雪崩事故により 8 名の死亡者をだしてしまった事実は非常に重大だ。同じスタイルでの春山安全登山講習会の開催は、遺族、被害者は絶対に賛同しない。
- 雪崩に遭遇するか、回避できるかは、その危険場所に入るかどうかで分かれる。その判断は最終的に各班講師に任されていた。班の講師の判断には、雪崩に対する知識や状況理解、危機意識や安全管理が深く関わる。計画変更決定者の 3 名だけの問題ではなく、登山専門部全体の問題だ。同じ感覚を持つ指導者が講習会を運営することに、遺族等は納得できない。
- この講習会自体がいくつもの矛盾を抱えて継続されてきた。例えば、最も講習を必要とする 1 年生は参加していない、春山や夏山より講習会の方が積雪が多くより危険性が高い、雪山登山講習で夏山安全登山を学ぶ、生徒と経験の浅い顧問がともに受講者、積雪期の安全登山で何を学ぶのかが不明瞭などがあげられる。
- 多くの学校の生徒を集めて行う良さは、初日に全体講義以外あまりない。第 2 日目以降は学校別の活動である。実技指導は各学校の実情によって違っている。第 2 日目以降は各学校が単独で行っても同じ成果があげられるだろう。
- 多くの学校の生徒と顧問が集まって実施するためマイナス面が出てくる。一つは責任者が曖昧になることだ。今回も高体連会長や登山専門部長が責任者であるが、直接的にはかかわらない。各校が主催者になれば、校長が責任者になり、安全管理や危機管理がより徹底される。二つ目は、今回のように生徒と講師が別学校という班編成ができてしまい、生徒との信頼関係ができないまま指導するマイナス面が大きい。

(2) 高校生の雪山登山は原則中止すべきだと思うが、どう考えるか。

7 年前にも同じこの春山安全登山講習会で人為的な要因である雪崩事故を起こし、教員と生徒が被害にあった。そのことが広く県内山岳部顧問や登山専門部に教訓としては残されず、また今回も同じように人為的な誘発で発生した可能性のある表層雪崩を回避できず、8 名の若い命が失われた。この事実が生徒や保護者に与えた影響は計り知れない。

また、文部科学省では以前から冬山登山で「原則高校生の冬山登山は禁止」の通知を出しているにも関わらず、県内ではいくつかの学校が雪山合宿と称して冬の登山を実施し、更に本件の講習会で雪山登山を実施している。講習会という名目で実施し、必要な基本的手続き等も省略し、装備や準備も十分に整っていない状況で、未熟な高校生を雪山につれていっている。

こうした登山専門部の軽薄な判断と行動は、生徒の命の重みや雪山で生徒の命を守ることがいかに難しいことであるかを忘れたような思考と行動である。

基本的な安全確認や危機管理といったことを自分たちの経験則だけに頼って講習会を運営し、生徒を指導してきた雪山登山は、原則中止すべきである。

10 登山専門部は何度でも自分たちの判断と行動について何が足りなかったのかを検証しなければならない。高体連は登山専門部の検証を見守り、助言をしなければならないと思う。このことについてどう考えるか。

特に、今回の事故に至る第 3 日目の朝のラッセル訓練へと決まっていくな流れをもう一度見直し、どこに問題点があるのか、何が足りなかったのか、どのような知識が必要であったのか、



何がそうさせたのかなど、再度問題点を明らかにすることが、類似の雪山登山における事故防止には欠かせない。

高体連や登山専門部は、検証委員会にだけ任せないで、今回の雪崩事故を生み出している背景と要因を調査検証しなければならない。問題は指導者の知識や技術だけでなく、その判断と認識や意識の問題であると内省し、指導者の集まりである組織の体質や危機管理能力についても調査分析を行い、真剣な検討と徹底的な改善を図らなければならない。それができなければ、また同じような判断と認識による事故を起こしてしまう。